

ワールドカップは終わり、 7万人スタジアムが残った

木村 重治

（財）横浜市スポーツ振興事業団
横浜国際総合競技場 副場長

2 002年6月30日、優勝したブラジル代表チームキャプテン、カフィー選手が黄金のトロフィーを高々と掲げ、270万羽の折り鶴が舞い降りる中で、第17回FIFAワールドカップ「夢の舞台」はその幕を閉じた。横浜国際総合競技場では、決勝戦を含む4試合が開催され、国内外から26万人の観客で賑わい、7万人スタジアムのすばらしさにつ

いて、多くの賞賛の声をいただいた。しかし、あれから1年が経過した今年6月、各メディアは一斉に、試合場となった国内10のスタジアムの「赤字問題」と「今後のスタジアムのあり方」を取り上げ、「ワールドカップが残したものは、楽しい思い出と借金だけ」と報じたメディアもあった。

本当にそうなのだろうか。「思い

出と借金」だけが残ったのだろうか。今は、別の業務に就いているワールドカップを共に支えた多くの仲間一人一人の顔を思い出しながら、ワールドカップを振り返り、今後のスタジアム経営について考えてみようと思う。

①ワールドカップで見えてきたこと

98 年3月にオープンした横浜国際総合競技場はオープン5年目にワールドカップを迎えた。この間に、横浜国際総合競技場で開催されたサッカー日本代表戦は10試合を数える。6万人規模の国際試合の経験、ノウハウは十分に蓄積してきたつもりだった。しかし、各国元首をはじめとする多くのVIPや海外の報道関係者、外国人観客の来場は予想していたとはいえず、これまでの経験・ノウハウをはるかに超えるものだった。

危機管理対策も予想を超えていた。危機管理というと、要人警護やテロ、フリーガン対策が話題になったが、その陰に隠れたもう一つの危機管理対策があった。主催者であるFIFA（国際サッカー連盟）にとって、最大の問題は高額な放映権料

を支払った世界の各テレビ局にワールドカップの国際映像を提供することだった。決められたスタジアムで、決められた時間に、両チームの選手・審判がそろい、試合を開始し終了までテレビ中継を行うことである。スタジアムに対しては、ゴールポストが壊れた場合の即時復旧と電源及び通信回線をダブルで確保することが求められた。確かに、これまでに試合中にゴールポストが壊れたり停電することは想定していなかった。テロやフリーガン対策が叫ばれるなかで、彼らの危機管理意識がどの辺にあつたのかがよく見えたリクエストだったと思う。

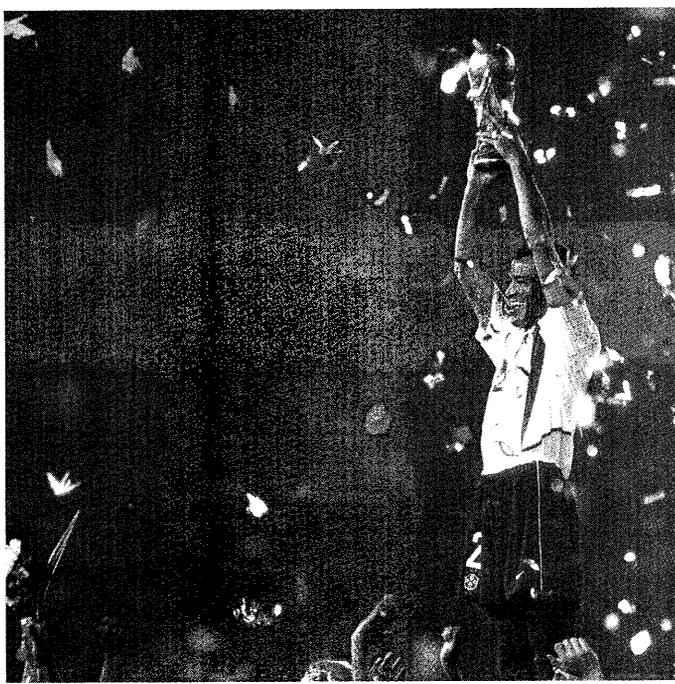
ゴールポストについては、海外のスタジアムが使用している強度よりも取り替えの容易さを優先したタイプのものに交換した。電源については、2倍の発電容量のある自家発電装置を海外から取り寄せ、東京電力の送電を補助電源とした。通信回線はケーブルをダブルにした。ワールドカップでなければ見えてこなかったことである。このような小さな小さな、しかし貴重な経験がこの7万人スタジアムにはいくつも残されている。

②地元の誇り
FIFAワールドカップ2002はヨコハマの1人勝ちと言ったのは当時の西田善夫場長だった。決勝戦会場の開催地として、「横浜」の名が世界を駆け巡り、世界は「横浜」の名に強い反応を示したからだという。

地元の声も紹介しておこう。ホームチームである横浜F・マリノスのスタッフはJリーグが中断しているワールドカップ期間中、各試合会場でワールドカップを楽しんだようだ。観客として各スタジアムを訪れ、改めて横浜国際総合競技場の快適さを実感していただいたようである。

ワールドカップ後の復旧工事もあり、横浜F・マリノスの選手を再びピッチに迎えたのは9月になってからだだった。その間、「やはり横浜国際がいい」「早く横浜国際に戻りたい」という声を何度も聞いた。そして、今シーズン横浜F・マリノスは「目指せ優勝・横浜国際超満員」をスローガンに掲げ、見事1stステージ優勝を果たした。

ワールドカップを経て、横浜F・マリノスと横浜国際総合競技場が固



©Jリーグフォト 2002.6.30 ブラジルVSドイツ



2002.6.11 アイルランドVSサウジアラビア

く結ばれたことを物語るスローガンである。

地元の小机商店街からは「このスタジアムは町のシンボル、地元の誇り」という声をよく聞くようになった。田舎に帰っても、海外に出かけても「あのワールドカップ決勝戦会場の町・小机」といっては、胸をはれるからだという。もう一つの地元、新横浜の若手経営者からは、「新横

浜は横浜国際総合競技場の城下町だ。7万人スタジアムと共に生きていきたい」との声まで上がるようになった。実際、彼らは例年5月に行ってきた30万人規模のお祭り「新横浜パフォーマンス」を、今年は横浜F・マリノスの1stステージ最終節8月2日に変更し、マリノスと協力して「優勝」と「横浜国際超満員」を実現してしまった。98年3月に誕

生した7万人スタジアムは地元の人々によって育ててもらい、ワールドカップを経て、この地に大きく根をはり、地元の誇りとまで言われる大木に成長することができた。

③ これからのスタジアム経営

と感動の7万人スタジアム」をスローガンに、①7万人の集客、②トップアスリートが目指す「夢の舞台」、③350万人市民に親しまれるコミュニケーション空間の形成を目標として、これからのスタジアム経営を展開したいと考えている。

ワールドカップが残した最大の遺産は、サッカーであれコンサートであれ国内で7万人規模のイベントを企画した場合、先ず会場として横浜国際総合競技場を思い浮かべていただけるようになったことである。ワールドカップ後の7万人イベントとしては、ヨーロッパと南米のクラブチャンピオンチームが世界一をきそつうトヨタカップが横浜で開催される

ようになった。昨年は、レアル・マドリード（スペイン）とオリンピア（パラグアイ）の両チームが来場し、レアルが誇るロナウド、ラウル、ジダン、フィーゴ、ロベルトカルロス等のスター選手のプレーを6万6千人の観客に楽しんでいた。コンサートについても昨年のB'zにつき、S.M.A.P、サザンオールスターズの7万人コンサートを開催することができた。いずれもワールドカップ決勝戦会場のステータスが実現可能にしたイベントで、第1の目標である7万人の集客は達成されようとしている。

第2の目標については、今年、陸上日本選手権と全日本大学対校選手権（全日本インカレ）が初めて開催された。競技種目の壁を超えて、7万人スタジアムはトップアスリートが目指す「夢の舞台」になろうとしている。

第3の目標については、優勝したブラジルチームのサインが残るロッカールームが人気を呼んでいるスタ

ジアムツアーが始まった。案内するのはワールドカップボランティアの人達である。スタジアムウエディングも始まった。10組のカップルが横浜国際総合競技場のピッチから新たな人生をスタートしようとしている。最後に、収支についてふれておきたい。15年度は経費8億円のうち、市負担額5億3千万円でスタートしたが、決算ベースでは、市負担額を4億円にまで縮めることができそうである。オープン当初の市負担額を経費の1/2に押さえるという目標は達成できそうである。そして、横浜市が検討しているネーミングライツが実現すれば負担額はさらに小さくすることが可能である。それでも億単位の負担が残ると言われそうであるが、スタジアムの収支が改善の方向に進んでいることは確実にある。ワールドカップは「楽しい思い出と7万人スタジアム」を残してくれたのである。